

「標準語」確立を認識する状況が生じたのではないかと想像できるが、それに関する史資料が全くないのか、そもそも議論がなされていないのかなど、説明がほしかった。

第五章では、著者は第二章から第四章までの議論をまとめ、ラオスの言語ナショナリズムについて総括している。そして、「おわりに」では、序章の理論的枠組みにもう一度立ちかえって、本書全体を総括しており、丁寧でわかりやすい構成となっている。

本書で考察されているラオスの言語ナショナリズムは、言語というより文字ナショナリズムと捉えたほうがわかりやすい側面がある。著者はラオ語の標準化をタイ語との「否定的同一化」で説明しているが、ラオスにおいては、ラオ語とタイ語の差異が方言ほどであるのと同じように、ラオ語にも存在する様々な方言〔上田 1996: 94〕が、標準化の議論から捨象されてきたのである。これは一体どうしてなのだろうか。この点に関する著者の見解が十分でないのが残念であるが、ラオスにおいては、議論の中心には文字があった。著者の考察から、文字数や綴りにおいていかにタイ語と差異化するかが標準化の議論の中心になってきたことは明らかである。ラオ語とタイ語の差異は問題になるが、ラオ語における方言の存在は標準化にとって問題にならないのであるとしたら、ラオ語を国民語として形成していく過程は、第三章第一節(4)で著者が説明している文字ナショナリズムと捉えたほうが適切であろう。いかに文字を綴るかということが、ラオスでは、植民地時代以降、一貫して大きな課題であり、ナショナリズムの発露となり続けてきた。文字ナショナリズムに収斂するナショナリズムのあり方、そこにラオスを見るのは評者だけではないはずである。

ラオス研究においては、史資料状況が厳しいことが研究上の大きな制約となっているが、著者は、この分野における可能な限りの史資料を収集しており、その努力に敬意を表したい。本書は、世界各地の史資料を丹念に収集し、読破した結果生まれた、著者渾身の成果である。著者はラオス研究の成果としてだけ評価されることを望んでいないであろうが、研究が多いとは言えないラオス研究

において、ラオスナショナリズムの質を詳しく分析した本書の意義は計り知れない。これからのラオス研究において必読書となる本書が、より多くの読者を獲得することを願ってやまない。

(菊池陽子・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

参考文献

- 酒井直樹. 1996. 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』東京：新曜社。
- 鈴木玲子. 2010. 「耳を澄まそう、話してみよう——ラオス語の特徴」『ラオスを知るための60章』菊池陽子；鈴木玲子；阿部健一（編），264-268 ページ所収。東京：明石書店。
- 上田玲子. 1996. 「言語」『もっと知りたいラオス』綾部恒雄；石井米雄（編），93-102 ページ所収。東京：弘文堂。
- 安田敏朗. 2000. 「帝国日本の言語編制——植民地期朝鮮・満州国・『大東亜共栄圏』」『言語帝国主義とは何か』三浦信孝；糟谷啓介（編），66-83 ページ所収。東京：藤原書店。

田村慶子. 『多民族国家シンガポールの政治と言語——「消滅」した南洋大学の25年』明石書店，2013，206p.

I 各章の概要

著者は1956年に開学し1980年に「消滅」した南洋大学（Nanyang University，以下南大）というシンガポールの私大の歴史を、報告書など多くの一次資料にあたり丁寧に辿っている。著者によれば本書ではこの歴史を「数では圧倒的に英語派に勝るものの、政治権力からは遠かった華語派華人が英語派との抗争の末に社会の周縁に追いやられていく過程であり、権力の側から見れば、多民族多言語の社会において民族の言語や文化をどのように政治的に管理するかという政治と言語の葛藤の歴史」と捉えて分析している（p.20）。

第1章では、権力側の反対の中、華語派華人の言語と文化遺産のシンボルとして南大が設立される経緯を考察している。南大はシンガポールやマ

ラヤ（現在の半島マレーシア）地域の華語教育の最高学府として設置され、その開学と運営資金は東南アジアに住む中国移民たちの献金で賄われた。

第2章では、南大を不適格とした2つの報告書をもとに、学位の承認が政治勢力の駆け引き材料として利用された経緯、特に南大の設立に尽力した大富豪タン・ラークサイと国父リー・クアンユーとの学位承認を巡る対立を中心に華語派華人と英語派華人との政治的対立を浮き彫りにしている。本章ではまた、のちに「南大精神」と称えられることとなった学生たちの相互扶助の学びについても紹介している。

第3章では、シンガポール独立を挟んで調査・刊行された南大課程審査委員会報告書の影響について考察している。この報告書が南大の改革・再編、そして英語重視を指示したことで学生が授業をボイコットした。1963年の選挙では英語派華人主流のPAP（People's Action Party 人民行動党）対社会主義路線の南大支持者の対立が顕在化した。総選挙後、政府はタンの監督責任を問い、遂には市民権を剥奪する。これに反対する学生がデモを実施し逮捕者まで出た。南大が華語大学であり続けることを約束した上で、政府は南大を管轄下においた。

第4章では、政府が南大をシンガポール国立大学（National University of Singapore, 以下、NUS）と合併させ英語を教授媒体と決定し事実上南大消滅へと導いた過程について論じており、シンガポール華人とマレーシア華人との反応の違いを比較している。シンガポールでは1966年に二言語政策が発表されるが英語に重きが置かれ、特に華語の場合は中国の共産化に伴い奨励しなくなる。政府が外資導入政策を実施したこともあり、就職機会を狙って親が子供を英語校へ送るようになった。マレーシア華人側は本国のマラヤ大学がマレー化を推進したこともあり、南大の消滅にはエスニック・アイデンティティ上の抵抗があったが、すでに異なる独立国家となった隣国の大学行政について介入する権利はもはやなかった。

第5章では、南大消滅と同時に政府が開始した華語普及運動とこの政策によって華語派の間で南大復権運動が一時盛り上がったが挫折した理由を

探る。高度経済成長期に突入した1970年代には小学一年生の7割以上が英語校に集中し非英語校の消滅が懸念されるようになると、政府は第二言語の強化を唱える。政府が憂えたのは人材以外に資源を持たない都市国家の未来と国民がアジア人としてのアイデンティティを失い、根無し草になることであった。そこで政府は1979年華語普及運動を開始するのだが、同時期に南大を消滅させるという矛盾した政策が華語派華人を落胆させた。華語大学南大の歴史は同時にシンガポールが英語国家へと向かう過程でもあった。

II 本書への批評と特筆点

著者がシンガポールにて研究調査した2011年9月から2012年5月末までは奇しくもシンガポール政治史における転機にあたった。2011年4月の総選挙で野党が躍進し、建国以来、リー・クアンユーが初めて要職を退き、ポスト・リー時代の幕開けとなった年でもあった。その年に早くもリー時代の総括を始め、それまでタブーとされた南大問題とその消滅過程について取上げたことは特筆に値する。英語のみでなく中国語の一次資料にもあたり、華語派華人からの視点に光を当てていることも新鮮である。著者自身が本書の意義として述べているように、日本語で南大の興亡史をまとめた先駆的研究となった。

本書は著者の南大への熱い思いが語られる一方、豊富な調査結果をすべて消化し切れたとは言えない。著者が熟成期間をおいて、この研究調査をもとに巨視的観点からさらなる考察を深めていくことを楽しみに成果を待ちたいと思うが、現時点での本書に対する批評と今後の考察への期待を4つの観点から以下に述べる。

① シンガポール国内の政治問題：

独立以前からのシンガポール多民族・多文化社会における言語政策にシンガポールの教育の現場、そして南大が翻弄されていく経緯がつぶさに報告されている。政治と言語の問題はシンガポールの国家アイデンティティの問題であり、多くの研究者によって広く議論されてきた。テーマ自体は目新しいものではない。だが、これをタン・ラークサイという財界の立志伝中の人物を華語派華人の

代表として、国父リー・クアンユーを英語派華人の代表として両者の政治的対立軸を中心に議論しているのが新しい。但し言語を巡る政治は複雑であり、華人系財界内における言語・学歴と政治の葛藤も今後考察を深めてほしい点である。たとえば当時 SCCC (Singapore Chinese Chamber of Commerce 新加坡中華總會) の中心人物の多くはバイリンガルであったのに、タンと他1名のみが華語モノリンガルであり [Yong 1992: 281], 1906-41年の歴代会長のうち、ほとんど無学なのはタンと他1名のみだった [ibid.: 64-65]。この華人系財界内における立ち位置はタンの南大設立への情熱と無縁ではなかったはずだ。

② シンガポールを巡る国際関係：

南大にとって不運だったのは、その設立時期であった。本書では冷戦によって中国との関係が変化し、南大が政府のナショナリズム政策とディアスポラのアイデンティティ確立運動との間で政争の具として翻弄される様子は丁寧に描かれている。しかし南大の不人気は、1950年代のイギリス政府の文化外交政策（外貨獲得と英語の国際的地位維持が目的）のあおりを受けたことも否めない。政治と言語というテーマであれば、宗主国時代だけでなく脱植民地後のイギリスの言語政策の影響についても分析があるとさらによい [都丸 2013: 500]。

③ シンガポールの国内の社会・文化問題：

①でも述べたが華語派華人内の葛藤についてはもう少し、また英語派華人側の多様性についても言及されていると言語と政治の問題の複雑さが立体的に立ち上がったように思う。たとえばリー・クアンユーが単なる英語派華人ではなく移民4世でプラナカン（海峡華人）であることが、この問題に与えた影響についての説明は一般読者には必要だったのではないかと [田中 2002: 200-212; 奥村 1999]。

また社会階層の違いによる思惑の乖離もある。華語派華人の一握りのエリートや大富豪にとっての中国文化継承という大義よりも、華人の一般大衆にとっては子供たちが国際都市シンガポールで良い就職ができるかのほうが重要であった。「家庭でおもに話す言語」という政府統計を引用し

(p.164)、華語派華人の協力で華人系では華語使用が英語のそれを大きく上回った、としている (p.168)。確かに1980年と2000年を比較すると伸び率は英語約2倍に対して華語3倍以上。この伸びは方言が半減した影響のほうが大きい。しかし2010年の統計では伸び率が逆転し、華語約2%の微増に対し英語は約10%伸びている。また若年層や社会階層上位集団に限ってみれば英語話者のほうが多く、10年間でさらに英語使用に拍車がかかっている。¹⁾

④ 南大が抱える内部問題：

リーが「南大は最初から消滅を運命づけられていた」というのは、あながち見当はずれのコメントとはいいがたい。著者は南大を「権力に祝福されない大学」とし、消滅への政府責任を強調している。確かにNUSとの合併を決定したのは政府であり、リーがタンらの市民権を剥奪したのは行き過ぎのように見える。しかし冷静に大学運営という視点から見れば、南大は華語最高学府としては開学当初から不備が多くその運営基盤が脆弱であったこと、財界人中心の理事会に柔軟性が欠如していたことも消滅の大きな原因だったのではないかと。リーからの圧力がなくとも変動する社会の需要に即した経営陣の刷新やカリキュラム改編などを実施しない限り、自滅した可能性も否めない。

国家のナショナリズムを代表するNUSに対して、南大は「ディアスポラの大学」であった。だが東南アジア華人ディアスポラの文化的頂点としての

1) 参考までに2010年のセンサスでは、5歳以上の華人系がおもに家庭で話す言語は、華語は2000年45.1%から2010年には47.7%と微増だが、英語は23.9%から32.6%と大きく伸ばし、方言は30.7%から19.2%と激減した。年齢別では5歳から14歳の年齢層では、華人系52%、インド系50%、マレー人でも26%が家庭で英語を最も頻繁に話す。住居別では全体では華語が英語の約1.5倍話され、HDB (Housing and Development Board) の団地では2倍。ところが、戸建ての家では逆転し英語が華語の2.4倍となる。学歴別では大卒者の英語使用は49.4%、華語は40.8%。つまり若年層や社会階層上位集団では英語使用が優勢である。(Census of Population 2010, Tables 47, 52 and 56; Census of Population Statistical Release 1: Demographic Characteristics, Education, Language and Religion [Singapore, Department of Statistics])

カリキュラムを提供できず、また時代のニーズに
適応した改革ができなかったのはなぜか。今後、
南大の運営の限界・失敗をさらに深めて分析する
と、近年大学改革に揺れる日本の一般読者の興味
が南大の興亡史に強く引き付けられるように思う。

最後に術語の問題で気になった点を記しておき
たい。それは本書における「メルティング・ポッ
ト」の使用例である (pp. 13, 169)。たとえば「主
要な民族がそれぞれの言語や文化、アイデンティ
ティを保持しつつ国家の発展に寄与するという文
化多元主義的な『メルティング・ポット』的な統
合政策」(p. 169)とあるが、各民族文化の並行共
存を強調する場合は「サラダ・ボウル的な統合政
策」と表現したほうが適切ではなかろうか。この
文脈で「メルティング・ポット」という術語を使
用すると、アメリカ多民族・多文化社会の議論に
親しんでいる読者には混乱を招く恐れがある。も
ちろんこの点が本書の意義を損なうことはない。
あえて指摘したのは本書をシンガポール研究者の
みでなく、広く多民族・多文化社会に興味を持つ
多くの読者に手に取ってほしいと願うからである。
本書はシンガポール政治史に留まらず、多文化都
市国家にとって大学の存在意義、そして言語とナ
ショナルズムについて考えさせられる書でもある。

(奥村みさ・中京大学国際英語学部)

参考文献

- Singapore, Department of Statistics. <http://www.singstat.gov.sg>. (最終アクセス 2013 年 9 月 3 日)
- Suryadinata, Leo, ed. 2002. *Ethnic Chinese in Singapore and Malaysia: A Dialogue between Tradition and Modernity*. Singapore: Time Academic Press.
- Wang Ling-chi; and Wang Gungwu, eds. 1998. *The Chinese Diaspora: Selected Essays*. Singapore: Time Academic Press.
- Yong, C. F. 1992. *Chinese Leadership and Power in Colonial Singapore*. Singapore: Time Academic Press.
- 奥村みさ. 1999. 「書評論文 リー・クアンユー『シンガポール物語——リー・クアンユー回顧録』」『国際学論集』43: 81-92.
- 奥村みさ; 郭 俊海; 江田優子ベギー. 2006. 『多

民族社会の言語政治学——英語をモノにした
シンガポール人のゆらぐアイデンティティ』
神戸: ひつじ書房.

田中恭子. 2002. 『国家と移民——東南アジア華人
世界の変容』名古屋大学出版会.

都丸潤子. 2013. 「解体する帝国の対外文化政策
—— 1950 年代後半のイギリスの対アジア文化
政策の変容」『国際文化関係史研究』平野健一
郎; 古田和子; 土田哲夫; 川村陶子 (編),
495-518 ページ所収. 東京大学出版会.

松浦健二. 『シロアリ——女王様、その手
がありましたか!』岩波書店, 2013, 120p.

シロアリと言えば、アリの形をした白色の、ウ
ジャウジャと木に巣食う気持ちの悪い害虫をイ
メージされる方が多いのではないだろうか? しか
し、「シロアリの姿を思い出してください」と言わ
れると、正確に思い出せない人が大半なのではな
いだろうか。つまり、多くの人はシロアリのこと
を良く知らず (一度も直視したことが無い人も多
いだろう)、ただただ害虫として毛嫌いしていると
思われる。かくいう私もその一人であった。特に
日本の場合、存在するシロアリ分布は関東以南の
太平洋側や四国、九州以南に偏っており、本州で
主に見られる種は 2, 3 種程度ということなので、
それも当然のことと思える。しかし、『東南アジア
研究』の読者の多くが調査フィールドとしている
であろう熱帯域は、時には 1 ヘクタールの熱帯雨
林に 30-40 種のシロアリが採取できることがある
[竹松 2012]、カメルーンでは 1 平方メートルあた
り 1 万匹のシロアリがいる、というように桁違い
のシロアリの多様性とバイオマスを有している。

シロアリは人の居住地では家屋を食う害虫とし
て認識されている一方で、森林生態系においては
枯死植物や土壌中の有機物を食べる「分解者」と
して物質循環の一部を担う重要な働きをしている。
また、本書で紹介されているように、アフリカの
サバンナでソーセージ大の女王シロアリが貴重な
栄養源として食されている。このように、とりわ
け熱帯域において、自然環境の物質循環機構の解